

気候変動の予測

- これからの夏は35℃以上の猛暑日が当たり前。
- 熱中症への注意や、生態系や農作物に影響が出る恐れ。
- 大雨や短時間強雨の発生頻度や強さが増加する。
- 降雪や積雪は減少するものの、雪の降り方は極端に。
- 日本付近の台風の強度は強まる。



私たちにできる、気候変動の対策。

こうした気候変動の現状と将来予測を踏まえて、私たちにできることは何でしょうか。それは、「適応策」と「緩和策」を同時に進めることです。「適応策」は、気候変動が進むことを踏まえて「備える対策」。「緩和策」は、温室効果ガスを減らして「地球温暖化になるべくブレーキをかける対策」です。

適応策の一つは、気象や災害の情報を早めに受け取り、早めに安全な場所にいて命を守ることです。ここでは、3つの情報源をご紹介します。

適応策① 3つの情報源

情報源1 気象庁のホームページ「雨雲レーダー」

GPS機能を使って、自分が現在いるエリアの降雨場所や15時間先の雨雲の動きが分かる。

情報源2 国土交通省ホームページ「川の防災情報」

自分がいる場所の警報や雨雲レーダー、川の水位、危険河川が分かる。

情報源3 国土交通省ホームページ「ハザードマップポータルサイト」

自分の住んでいる市町の土砂災害リスクがある場所や自然災害リスクを知る。



次に「防災の備え」です。最低限の備えの3つをご紹介します。

適応策② 3つの備え

備え1 懐中電灯と電池

携帯電話はいざというときの情報源。停電時、携帯電話用の電池式充電器があると便利。

備え2 飲み水と非常食

数や量は置き場所に合わせて。教科書通りでなくてよい。市販の缶詰など、食べたらずい足せばよい。

備え3 非常用(携帯用)トイレセット

水がいらず、消臭袋、凝固剤が入っている。



最後に「緩和策」、地球温暖化になるべくブレーキをかけるための対策です。私たちができることは、省エネに少し気を配った生活、電車やエコカーの利用、森林の保全などいろいろあります。環境に配慮している「クールチョイス」マークも、商品を買う際に意識するなど個人でできることです。

そして何より大切なのは、家族が地球温暖化のニュースに関心を持つこと。危ない天気の時、天気予報で早めに情報を得て備えをすること。将来世代にとっても今の目先の災害に対しても、「念のため」と心をつぶやいて行動してみたいかがでしょう。

第2部

アンサンブル金沢 弦楽四重奏

ヴァイオリン



まつい なおき
松井 直氏

ヴァイオリン



あおき あやね
青木 恵音氏

ヴィオラ



ほんにや よしこ
般若 佳子氏

チェロ



おおさわ あきら
大澤 明氏

幅広い演奏活動を通して高い評価を得ている、オーケストラ「アンサンブル金沢」による弦楽四重奏の演奏会が行われました。



曲目

シューベルト／弦楽四重奏曲 第10番 変ホ長調 D87 作品125-1
ホフシュテッター／セレナーデ
ハイドン／弦楽四重奏曲 第79番 二長調 Hob.Ⅲ:79 作品76-5「ラルゴ」

環境エネルギー講演 & アンサンブル金沢弦楽四重奏

福井県環境・エネルギー懇話会では、音楽を楽しみながら、エネルギーや環境問題について考えていただく、講演&コンサートを毎年開催しています。本誌では、2021年3月14日(日)に福井新聞社風の森ホールで行われた講演を中心にダイジェストで紹介いたします。



第1部

ENVIRONMENT ENERGY LECTURE

気象キャスターから見た異常気象と地球温暖化の話



進む地球温暖化と、世界や日本の動向。

私は気象予報士として、地球温暖化の危機感をひしひしと感じています。世界の平均気温は昨年、2016年に次いで統計史上1位タイとなりました。日本も昨年、統計史上1位の平均気温を記録。各地で40℃超を観測しました。

こうした気候変動に対し世界は2015年、約200の国・地域が参加したパリ協定を締結。21世紀末までに、130年前の工業化以前と比べ気温上昇を2℃未満に抑える、脱炭素化の世界を目指しています。地球温暖化の原因の一つに、化石燃料の使用や森林を伐採するなど「人間活動の影響」であることが極めて高く、増加している温室効果ガスの排出を世界で協力して減らそうとしているのです。

日本も昨年、2050年までに「温室効果ガス排出量の実質ゼロを目指す」ことを宣言。電源構成の8割以上を化石燃料に頼っており、地理的・気候的条件で再生可能エネルギーはメインのエネルギー源にできないなどの課題を抱えていますが、2030年に火力約56%・再エネ約24%・原子力約20%という理想のエネルギーミックスを達成しながら、カーボンニュートラルに向かおうとしています。

講師

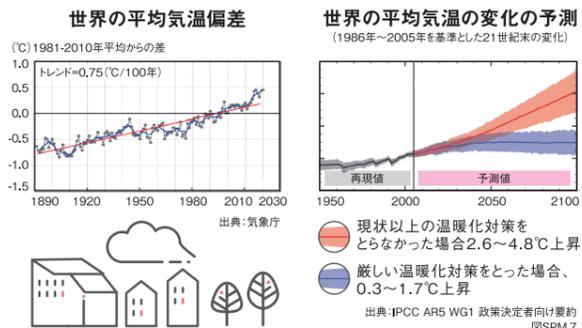
気象予報士・防災士 蓬萊 大介氏

1982年兵庫県明石市生まれ。2006年早稲田大学政治経済学部卒業。2011年読売テレビ気象キャスターに就任。現在、読売テレビ「情報ライブ ミヤネ屋」「かんさい情報ネットten.」「ウェークアップ!ぶらす」「a-yan」にレギュラー出演中。テレビ以外にも執筆や講演活動など幅広い。

現状とパリ協定が目標とするところを整理

世界の年平均気温は、2020年時点で工業化(130年)前よりすでに約1.2℃上昇している

なんとか2℃未満に抑えたい(できれば1.5℃にする努力を)



気温・雨・雪・台風の現状と将来。

地球温暖化の気候への影響を見ていきましょう。まず気温です。日本全国(13地点平均)の35℃以上(猛暑日)の日数は、100年前と比べて3倍に増えています。夜の最低気温が25℃を下回らない熱帯夜の日数も、100年前に比べて約3倍となりました。パリ協定の「2℃上昇シナリオ」に向けて厳しい対策を取ったとしても、日本の年間猛暑日の日数は21世紀末には、現在よりも2.8日増える予想されています。

気温の上昇と関係しているのが、雨です。いわゆるゲリラ豪雨のような、道路が冠水するレベルの降水量「1時間50ミリ以上」の年間発生回数は、最近10年間で30、40年前と比べて1.5倍に増えています。降雪は地球温暖化に伴い減少するものの、ごくまれに降る大雪のリスクは残っており、雨だけでなく雪の降り方も極端になるのではないかとわれています。

最後に台風です。必ずしも地球温暖化とは言い切れませんが、気象キャスターとして近年、台風の動きについて少し不気味に思うことがあります。日本の近くで発生し、3、4日で上陸する台風が目立っており、また、逆走台風や迷走台風で被害が大きくなることも頻発しています。